

草津市立矢倉小学校通信 令和4年3月17日 NO.20 最終号



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

型に入って型を出す

「型に入って型を出す」・・・これは、私が矢倉小学校に赴任し、最初に発行した「やぐら通信」のタイトルだ。矢倉小学校を去るまでの間、この姿勢で臨もうと立てた誓いでもある。

型は、道における伝統的な習得法だ。作法や手続きを愚直に倣うことそのものを意味したり、身につけた作法や手続きを意味したりするようだ。私にあてはめて言えば、校長としての在り方となる。すこしは、マシンな校長になっていきたいからである。

以来、これを折に触れて自身に問いかけ続けてきた。とりわけ、どうしてよいやら途方にくれてしまいそうになれば、まずは状況、情勢をしっかりとつかみ、あるべき型に照らして道筋を拓こうとした。子どもにとってどうなのか、保護者は、また先生方はどうだろうと、根っこに据えるものを定め、それぞれの行く末が立ちゆくようにと願ってのことである。型は、そのための型であり、それは、想定外のことに役立たない安っぽいマニュアル、堅苦しい規則では決していない。そんな意味で、取り組みの姿勢、ものの見方考え方と言ってもよい。お世話になり、支えて頂いた人物や、あこがれの人物を型と定め、あの人ならどのように受けとめ、次の一步を踏み出すだろう…などと、みんなが折り合い、納得できるものを手に入れようとしていたのである。

こうしていつの間にか5年が過ぎ、今に至った。肝心の型は、会得できたのかと問われれば、まだまだとしか言えない。

休み時間、一年生に鬼ごっこに誘われたときのこと。「校長先生、鬼ごっこしよう」と誘われ、多数決で鬼にさせられた。鬼の子どもに追い掛け回されるより、自分のペースで休み休み追いかける方がラクなので、内心ほっとしながら「しかたないなあ、鬼になるか」と言っている自分に気づく。やがて、むきになって追い掛け回す私に、数人の子から、「大丈夫？かわろうか？」などといったわりの言葉がかけられる。それほど自分は痛々しい走り方になっているのだろうか…。

ここ2年ほどは、今まで経験しなかったことに見舞われた。コロナ禍だ。これまで当たり前できていた多くのことに制限が加わった。計画していたことが十分にできずじまいになったことは実に口惜しい。しかしながら、そのような中、子どもたちはその制限の中からも大切なことを学んでいく姿を見せてくれている。録画とリモートで盛り上がった送る会。別れを惜しむ一年生は感極まり涙したという。お世話になった校舎に感謝しようと取り組んだ愛校活動では、廊下や窓ガラスなど校舎の隅々まで、丁寧に心を込めて掃除する6年生だった。「今どきの子どもは…」と、世を憂い嘆くように語っているだけの自分が恥ずかしくなってくる。

「型に入って、型を出す」・・・校長という立場でさまざまな子どもの学ぶ姿に立ち会うことをさせてもらった、なんとも幸せな5年間でした。3月末をもって、定年退職させていただきます。型に入りきれなかった私がここまで務めることができたのは、多くの方々にお世話になったからこそと、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。 校長 大林 道範